



平成23年5月23日

卓話 『フレンチ・ウィンドウ展:デュシャン賞にみる  
フランス現代美術の最前線 紹介』

森美術館 館長  
南條 史生 様

今日は「フレンチ・ウィンドウ展：デュシャン賞に見るフランス現代美術の最前線」という展覧会をご紹介します。マルセル・デュシャンはフランス近代のアーティスト。現代美術の父と呼ばれている人です。このデュシャン賞の受賞者を中心に27人の作家を選び、さらにデュシャンの作品も見ていただくものです。

デュシャンの作品としては展覧会のタイトルにもしたフレンチ・ウィンドウ。それから既製品をアートにしちゃったもので、有名なのは男性用便器にサインをして公募展に出したものです。審査員がこんなものアートじゃないと言うのに対して、これもアートだという議論を始め、ユニークな形の物体を選び取ったアーティストの着眼点の中にアートの本質があると言ったんです。それ以来アートはコンセプトだという話になった。今、皆さんが思いっしょ、わけのわからない現代美術の源流がここにあるんですね。そのほかの作家の作品としては新聞紙をクシャッと丸めた形そのままの金属の彫刻、パリと東京とニューヨークの街を上から見たところを描いた抽象画、ホースを無限大の形に繋げただけのレリーフ。こういう日常的な物を使って作品を作るのもデュシャンが提案したことです。

そのほかミシュランの有名なマークが黒人になっている作品、警官の警棒でできているパターンなどがあります。これはアラブ系の作家で、アラブ系は幾何学的なパターンを作るのが文化です。美術史上の有名な作品がシルエットで登場する作品は、見る人が見るとこれは誰それのだというのが分かるようになっていて、美術の知識を試される作品です。

また大変大きな馬車の作品が今、六本木ヒルズのろくろくプラザに置いてあります。真っ黒な6頭立ての馬車が緑の中を走り抜けているものです。是非ご覧いただきたいのは、天井に沢山のパネルが



はめ込んであって、その下に沢山転がっている銀色のボールに天井が映るものですが、一見何事もないような天井が玉の上に映るとドクロのイメージに変わるようなものもあります。

この展覧会が開幕した3月26日、5時間ぶつ通しのシンポジウムを行いました。震災の後、美術館に何が出来るか、まずそういうことを考えている人たちに来てもらって議論をしました。第一に支援活動を立ち上げたアーティストの情報を一つに集約しようということでArt for lifeというウェブサイトを作り、第二に50数人の作家に作品を提供していただいてチャリティセールを行い、売上げを赤十字に寄付しました。第三に被災者の方々の心のケアに向けて、赤坂プリンスに滞在中の被災者の方に森タワーの展望台から東京を見ていただいたり美術館を訪れていただきました。このようにフランス展の一方で震災対策として美術館にできることを模索し、やってみました。7月には建築家の方々と、どういうふうに東北を復興するのかというテーマで議論したいと思っています。

ありがとうございました。